

特116

684

重習  
直入

木賊

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



47116  
684

木 賊 概 説

内二十三卷ノ三

都の僧、父と別れたる一人の少年を伴ひ、少年の故郷なる信濃國園原に到り、木賊

刈る老人に會ひて其家に一夜を明しけり。其夜老人は、かどわかされ、我が子の行方を

思ひわづらひ、せめても其子の好き、小歌曲舞などして心を慰めける由を語り、今宵は

お僧の慰みに酒宴をなすべしとて内に入りけるが、座に在りし人、此老人は子を失ひ

為め時々物狂はしくなることあれば其心、給へといふ。少年は彼の老人こそ我が父なれ、然

れども暫く告げ給ふなと語る處に、老人出で來りて酒をすすめ、歌舞して、我が子を

見たき由嘆きけるより、遂に名乗り明して、父子再會の願を果しけり。

大正  
11. 4. 15  
内交

小書 早開傳

ツレ	シテ	ワキツレ	ワキ	子方	役別	装束	附	季	所
里人三人	尉	從者二人	旅人	僧		着附無地熨斗目 水衣 角帽子 腰帶 珠敷 扇	着附無地熨斗目 水衣 角帽子 腰帶 珠敷 扇	八月	信濃 濃里 伊國 伊原 那原 那原
						着附段熨斗目 縷水衣 紋附腰帶 扇 木賊持	着附小格子 水衣 角帽子 腰帶 珠敷 扇	曲柄 管古腹	習 重 習
						面河古父尉 尉髪 着附小格子 茶水衣 緞子腰帶 扇 木賊持 小結烏帽子 子方掛素袍			

# 木賊

世阿彌元清作

ワキ僧  
ワキツレ二人  
次才上  
ヨウク  
拍子三合

信濃路遠き旅衣。信濃路遠  
 ま旅衣日も遠々の心かたむかれん

都の者にてゆえに又これよむたりゆ御  
 方へ本國の信濃の國の人みそては  
 度のみ来た又とほ持ちらゆか。今一度  
 御對面ありたましよし作せられ

木賊

一

ノ長

山向我等御供申し。修徳の園へと  
 急ぎし道あるや。旅の園の戸明  
 暮て旅の園の戸明暮て宿のいつ  
 くとき定めあはく行方も知らぬ身  
 あらも伴ふ人の有明の月日程  
 あく木曾路を経て園原山よきま  
 けり園原山よきま着きてけり

ツシ  
 一七  
 射  
 三人  
 上  
 拍子  
 合ハズ

本賊灯る山の名まてても園原や  
 仗屋の里も秋ぞ来る  
 づれ一葉教るや音と残すらん  
 面白や跡は鄙の住ひあれども  
 げま名前の故やらん山野の眺も  
 氣色し立つ木曾の清坂の指より  
 浮み雲向の朝づく日園原山は

ツシ  
 三人  
 上

林賊

乃具

つろひて。木賊の野の青緑草の  
 法もあほ深し。牡鹿鳴く。背の  
 行方まで。毒や籠りし。園原の  
 可○小謡は信濃路や。可○小謡は信濃路や。木  
 曾の棧橋か。る身のふま。せと渡る  
 あら。は。まも。馴れ衣。は。たれ  
 て。袖の露も。い。あ。草。延。を。海。と

行しく有羽の朝。朝。朝。出づるや  
 物魚の野。人あ。ら。ま。い。ざ。い。ざ  
 木賊の。ら。う。い。ざ。い。ざ。木賊の。ら  
 うロシキ地上。い。ざ。い。ざ。木賊の。ら  
 い。ざ。い。ざ。木賊の。ら  
 る。園原山の木の向より。麻名。れ。出  
 づる。秋の夜の。影。も。い。ざ。い。ざ

木賊

法

らうよ甲上影も假ある昔の露  
 分け衣衣去去たれて外れわれわ  
 花花草草木賊木賊刈る木曾曾  
 の麻衣袖濡れて磨かぬ露の玉玉  
 ど教る上や露のたまたまも  
 の乱れ糸る糸ら胸ある月は  
 曇曇ら甲上げ乙は真行行よりも磨磨く

玉玉は真如如の玉ぞカ思思へ木賊  
 の又かわれも又木賊の身とた  
 思思く神が心磨磨けや磨磨け身のため  
 にも木賊刈りて取取らうよ木賊  
 刈刈りてさらうよらかなこれなる  
 射射殿に尋尋ぬすま事のゆ  
 け方の事にてゆか何事にてゆぞ

見<sup>ワキ</sup>やせは年たけおひたるか。手  
 づから木賊とめり持ちらおみ事。  
 その身にも應<sup>オウ</sup>せぬ業<sup>ウヂ</sup>と見ええて  
 不<sup>フ</sup>審<sup>シン</sup>にてそゆへ<sup>シテ</sup>その身にも應<sup>オウ</sup>せぬ  
 業<sup>ウヂ</sup>と承<sup>ウケ</sup>れぬ人がま<sup>マ</sup>ううこそゆへ。  
 さうあから<sup>ア</sup>園<sup>エン</sup>原<sup>ゲン</sup>山の木賊は<sup>ノ</sup>名<sup>ナ</sup>前<sup>ゼン</sup>  
 といひ名<sup>ナ</sup>前<sup>ゼン</sup>といひ歌<sup>カ</sup>人<sup>ジン</sup>も<sup>モ</sup>正<sup>シヤウ</sup>賞<sup>ウ</sup>脱<sup>カシ</sup>

あれど辛<sup>ツ</sup>づからめり持ち家<sup>イ</sup>土<sup>エ</sup>産<sup>ツ</sup>  
 と志<sup>シ</sup>しゆ<sup>ユ</sup>げ<sup>ゲ</sup>子<sup>シ</sup>げ<sup>ゲ</sup>ん<sup>ン</sup>む<sup>ム</sup>に<sup>ニ</sup>て<sup>テ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>さ  
 てこの處<sup>トコロ</sup>は伏<sup>フ</sup>屋<sup>ヤ</sup>の森<sup>モリ</sup>とやす<sup>ヤス</sup>森<sup>シ</sup>  
 のゆか<sup>シテ</sup> 正<sup>シ</sup>ん<sup>ン</sup>ゆ<sup>ユ</sup>あれ<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>え<sup>エ</sup>たる<sup>ル</sup>こそ  
 伏<sup>フ</sup>屋<sup>ヤ</sup>の森<sup>モリ</sup>にてゆへ<sup>シテ</sup> あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>伏<sup>フ</sup>屋<sup>ヤ</sup>の森<sup>モリ</sup>  
 は<sup>ハ</sup>常<sup>ジョウ</sup>赤<sup>セキ</sup>と<sup>ト</sup>やす<sup>ヤス</sup>木<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>ゆか<sup>シテ</sup> 正<sup>シ</sup>ん<sup>ン</sup>ゆ<sup>ユ</sup>  
 指<sup>コ</sup>に<sup>ニ</sup>一<sup>ヒト</sup>木<sup>キ</sup>う<sup>ウ</sup>す<sup>ス</sup>う<sup>ウ</sup>す<sup>ス</sup>と<sup>ト</sup>見<sup>ミ</sup>え<sup>エ</sup>たる

木賊

五

こそ常木はての。いま昔に似たる  
木にてゆはより常木とかし習ひし  
てゆこれの寄生木にてゆ古事の  
思ひ出でられてゆカハル中園原や仗屋に  
生ふる常木のあつと見えてあ  
まぬ君かまゝ詠めり行きてありと  
の見えてあまぬ君かまゝ詠まれ

てゆぞ 賦シテまき果はてゆづその心  
を行きて知りゆまあれども可はず  
し習ひたる義を以つて教の心  
と推量スイリヤウしゆよあの常木とこの  
邊ヘよりつたれだ見えてゆか木陰カゲは  
よりして見えてゆりぬぞとよその心  
と教人カカジン知りてありと見えてゆ



はぬ君かたむし詠まれたる歌よそ  
 のやらん <sup>ワキ</sup> かなて今も雲のりてた  
 えぬをぬか <sup>ミテ</sup> かなあかの事只今  
 その證據とらむせやとこと <sup>ワキ</sup> 互に  
 近づきまきちりりて <sup>ミテ</sup> 見ればあり  
 つる常木の <sup>ワキ</sup> 陰にて見ればかま  
 たえて <sup>ミテ</sup> 何れかそれぞ <sup>ワキ</sup> 不思議

○小謡

やあ <sup>ハナ</sup> 月おそはて <sup>ハナ</sup> の <sup>ハナ</sup> 正しく <sup>ハナ</sup> なる <sup>ハナ</sup> 常 <sup>ハナ</sup> 木の <sup>ハナ</sup> 陰 <sup>ハナ</sup> に  
 木 <sup>ハナ</sup> の <sup>ハナ</sup> 正 <sup>ハナ</sup> しく <sup>ハナ</sup> なる <sup>ハナ</sup> 常 <sup>ハナ</sup> 木の <sup>ハナ</sup> 陰 <sup>ハナ</sup> に  
 来 <sup>ハナ</sup> て <sup>ハナ</sup> なる <sup>ハナ</sup> ば <sup>ハナ</sup> かな <sup>ハナ</sup> り <sup>ハナ</sup> け <sup>ハナ</sup> り <sup>ハナ</sup> げ <sup>ハナ</sup> あり <sup>ハナ</sup> も <sup>ハナ</sup> 正  
 しく <sup>ハナ</sup> あり <sup>ハナ</sup> と <sup>ハナ</sup> の <sup>ハナ</sup> 見 <sup>ハナ</sup> を <sup>ハナ</sup> えて <sup>ハナ</sup> あ <sup>ハナ</sup> ら <sup>ハナ</sup> ぬ <sup>ハナ</sup> 君 <sup>ハナ</sup> か  
 たり <sup>ハナ</sup> 詠 <sup>ハナ</sup> 又 <sup>ハナ</sup> 墨 <sup>ハナ</sup> く <sup>ハナ</sup> こ <sup>ハナ</sup> の <sup>ハナ</sup> 常 <sup>ハナ</sup> 木の <sup>ハナ</sup> 面 <sup>ハナ</sup> 白  
 や <sup>ハナ</sup> げ <sup>ハナ</sup> 子 <sup>ハナ</sup> や <sup>ハナ</sup> 道 <sup>ハナ</sup> ある <sup>ハナ</sup> 心 <sup>ハナ</sup> と <sup>ハナ</sup> して <sup>ハナ</sup> 真 <sup>ハナ</sup> あり <sup>ハナ</sup> け  
 る <sup>ハナ</sup> 歌 <sup>ハナ</sup> 人の <sup>ハナ</sup> 詞 <sup>ハナ</sup> の <sup>ハナ</sup> 林 <sup>ハナ</sup> なる <sup>ハナ</sup> も <sup>ハナ</sup> や <sup>ハナ</sup> そ <sup>ハナ</sup> の

下

上

常木の種あらんその常木の種  
 あらん。いかた御僧達に申し我  
 等が私宅の且過にての一夜を明  
 かして御通るゆへあら嬉やさら  
 ば美らうずるにてのいかよお僧達。  
 所心安くは度ゆへ今の射殿の歩し  
 身に思ひのゆきて。時々の況おま風

情のゆその時の心得あつてはあひ  
 いらひゆへ心得してゆいかた僧  
 達今夜の心静かよ射か身の上  
 と措つて聞かせ申しゆへ。今の射の  
 子と一人持ちちてゆへと行方も知らぬ人  
 は誘われ暮るま失ひてゆへ若も行方  
 や聞くと思ひ。この路改ま居所を

立て。行き来の人々をめぐりめかしむわが  
 子の常の歌曲舞は好きとて友と  
 集め舞ひ謡ひの程よこの尉も  
 時々舞ひ謡ひの誰かあるは盃を  
 集らせし子方僧いかに申しの只今の尉  
 殿のわれらが親みてのワキ行只今の  
 尉殿は御親父にては是れもさやたらぶ

ヤガ頓ていふ名告りあらうずるにての  
子方いや暫く思ひ子細のゆへはまづ知ら  
 ぬよしほしてゆへへワキ心得申しの  
シテいかよ僧達に申しの餘りに夜長  
ワキにの程に酒と持ちて集りての  
ワキ御志の有難げにも飲酒の佛の戒め  
 にての飲酒の佛の戒めの事

木賊

し

あれどもがの廬山の真遠禪師虎  
 溪と考らぬ林宗はにだよ。陶渊明が  
 志にて飲酒を破りしぞか。まゝて  
 や我が子の歌ひし舞曲の酒宴の  
 戯よて先生と慰む志とばあどか  
 憐み珍ざらん。廬山の古を思し  
 召さべ心の感までも汲みて知る法

の真水と思召して飲酒の心きけ  
 て一つまごころをなれよ。それ過つて  
 仙家に入つて半日の客たりとらんと  
 も。若白里に帰つて七子の孫に逢ふ  
 事よともり。涙んや母の親  
 子よしてあどその情よからざらん  
 ていたいの薪をと採り老いたる母と

○甘曲独吟  
 ○切造唯子

下巻

ト

九  
ちごくみ。虞舜のたかくあなる父と  
敬ふも。孝の心あからんや。恨  
かありとも。孝恩の心あからんや。恨  
の。後。傳々たり。熱くは。教主釋尊  
も。羅睺為長子と説き終つり。況ん  
や。二佛の中間の衆生をして。恩愛  
の。あはれを知らざらん。の。本。は。異

あらす。石の火の。老の。同と。だ。は。も  
おどや。係ひも。せぬ。親の。千里を。行け  
ども。子と。忘れぬ。ぞ。真ある。子。あ。つ  
て。子。年。と。経れ。も。親。を。思。を。ぬ。習。白  
ひ。は。今。身。の上。に。知ら。れ。たり  
げ。は。わ。人の。親。の。心。の。圍。は。あ。ら。ぬ  
ども。子。と。思。道。は。迷。ふ。は。真

ありやわれあからその面影の志  
 らねぬ昔に返す舞の袖我が子  
 かりこそ舞ひものよこの手よは  
 かりこそさきぞきてたねに紙の  
 袖と垂れつら又酔狂も雑ると人  
 法後すらん酔位もふと思ふ後とや  
 人の心まふふと思ふ  
 序ノ舞

シテカ上、  
 子と思ふ身の老い鶴の鳴くものよ  
 上月、  
 げよ子と思ふ園の夜鶴の聲身の盃  
 中、  
 廻るも盃五老の月の影よ  
 酔ひ臥す枕のよ  
 親物に狂もぶ子の難すまものよ  
 シテ上、  
 あら怒めやた怒めやた舞  
 も歌も現あきも子故あれば老の

七世

二二

波のあそれ立ち帰る今一目交に見  
えよかりこの上の行か色まんこれ  
こそ別れ一清お松若と言ふはも  
すむ候かただそや神が子と夕月  
夜おぼつかりやらづねそ別れ  
神が子あるらん 夢る姿の衰へは  
げよそれあらぬ有様とよくよくん

れきすがげよ 親あけりいふ  
りけるそや 怨めやあごさねと  
くはも名告り終るぬそと逢ふ時  
だほも怨あるこの夢か夢にても  
逢ふこそ焼かりけれ かくて親  
子に逢ひ行のかくて親子に逢ひ行  
の安と故郷と改めて佛法流布の

下巻

十三巻

寺とあり。佛種の縁とあり。けり。跡に伏屋の物稽。浮世語にあり。けり。浮世語とあり。けり。

大正拾一年四月拾日印刷  
同 年四月拾五日發行

著者権限  
不許

著作者兼 廿四世  
發行者 觀世元滋

印刷者 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川 堂





終

